

# 風光

この地域は水郷地帯である。起伏の全くない平坦な所で、遙か向うまで水田が広がっており、浅野川、金腐川の堤防が、僅かにその風景に変化を与えている。

集落には、瓦をのせた土塀が所どころに見られ、幼い頃、その瓦の間に巣作りしているスズメを狙ったことを思い出す。

集落から離れ、田に立って周囲を見渡せば日本海側には、アカシヤやネムノ木などの防砂林に覆われた内灘砂丘が横たわる。河北潟の向うに宝達山が広がり、それに連なって東に医王山と屏風のような戸室山がせまり、南には霊峰白山が望見される。農作業の途中、腰を伸ばし遠くのこの景色を眺めて、多くの人々が疲れを、いやしたことであろう。

また、ほとんどの農家の庭には、柿の木、栗の木、梅の木、杏子の木などの、実のなる木が植えられてあり、子供達の楽しみの一つとなっていた。

河北潟に、多くの水門ができる前の状況を振り返ってみると、潟に近い田では、川と潟の水量の増減が、稲作に直接深刻な影響を与えていた。

少々の雨でも降り続くと、稲が冠水状態に陥るのが常で、水中に没することも度々であった。これに満潮が重なると、雨が止んでも水は引かず、被害は倍加。従ってこの場所での農作業は心身ともに辛酸を極めた。

このため、水路を縦横にはしらせ、当時唯一の運搬手段としての川舟が大活躍した。

収穫どきに水に浸った稲を舟で運ぶ。そしてこれを乾燥させるために水路沿いに樹木が植えられ、下枝を払い、生きたハサ木として大いに利用されたものである。

このハサ木は、岸边の土を固めるばかりでなく、風にも強く、舟からの積み降しにもいたって便利であり、先人達の智慧が偲ばれる。

いわゆる水郷地帯だから、水生の植物が多い。ミズアオイ、半夏生の群落、ヤブカンゾウ、カンガレイの群落、ガマ、フキノトウなどが水田と共に生き、季節の移り変りを、咲き乱れて教えてくれる。

白さぎ等が空に鮮やかに乱舞し、川面には、かいつぶりなどの水鳥も棲息している。

(大浦町・大西光衛)



138



139





- 141 冬の田んぼ  
142 東蚊爪町浅野川堤防  
143 冬の野鳥  
144 白サギ舞う、野鳥の楽園



145









148 土手に咲くヤブカンゾウの花

149 カンガレイの花

150 河北潟に自生するガマ





152

## 河北潟

遥かに広がった河北潟は、今日も満々と、水をたたえている。水辺には、ヨシが繁茂し、その中をカモが飛び交う光景は野鳥の楽園にふさわしい。潟に注ぎ込む川の流れにも、人々は釣糸を垂れて水と遊ぶ。河北潟はまさしく安らぎと憩いを与えてくれる自然の恵みだ。



153

- 152 河北潟遠景  
153 河北潟の野鳥





155



156



157